

学校名	山形市立千歳小学校	校長	森谷 弘昭
		研究主任	門間 祐
研究主題	<p style="text-align: center;">自ら考え、自ら判断し、自ら決定し、 自ら行動する子供の育成（2年次） —教師の学びと子供の学びの往還を連続させて—</p>		
研究主題設定の理由	<p>本校の今年度の教育目標は次のものである。</p> <p style="text-align: center;">自ら考え、自ら判断し、自ら決定し、自ら行動する子供の育成</p> <p>大小関係なく、子供の自己決定の場を増やすことで、自信をつけたり主体性を伸ばしたりする。自分に解決する力や現状を変える力があることを何度も自覚することで、自分は社会や世界を変えていくことのできる存在だと思ったり、社会を変えるのは自分だと考えたりすることにつながる。その結果、未来や自分に夢や希望をもつ。このような考えから設定した教育目標である。</p> <p>この教育目標を受けて、研究主題を次のようにした。</p> <p style="text-align: center;">自ら考え、自ら判断し、自ら決定し、自ら行動する子供の育成（2年次） —教師の学びと子供の学びの往還を連続させて—</p> <p>教育目標の達成、つまり、「自ら考え、自ら判断し、自ら決定し、自ら行動する子供」を育てるために、我々教師は学ばなければならない。教師の学びと子供の学びの関係について、以下の指摘がある。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・主体的に学び続ける教師の姿は、児童生徒にとっても重要なロールモデルである。 ・教師の学びの姿は、子供たちの学びの相似形である。 <p>教師の学ぶ姿勢や学び方が、子供のそれにも影響を及ぼすとともに、豊かに深く学ぶ教師のもとで育つ子供もまた、豊かに深く学ぶということである。よって、上記の目標達成に向けて、教師が学ぶことは必要条件といえるだろう。</p> <p>さらに、教師自身が問いを立て実践を積み重ね、振り返り、次につなげていく探究的な学びを教師自らがデザインしていくことの必要性も指摘されている。まさに、本校で育成を目指している子供の姿と同じである。これを踏まえて、校内研究をトップダウンなるものではなく、各教師の課題や興味、キャリアステージ等に応じて研究内容を決められるよう、小集団での活動を基本単位とした。ここで、根底にあるのは個人の思いに基づく学びである。小集団での研究活動において、視座を変えて見ることや、異なる視点の獲得、視野の拡張が期待でき、それによって個人の学びがより豊かに深まるだろう。さらに、ある枠組みから検討したり、理想と実態、理論と実践との乖離を小さくしたり、自身の授業観や指導観を必要に応じて変えたりすることも想定される。ここで、個人の思いや学びが淘汰されることのないよう留意したい。前述したトップダウンが小集団内でも起こらないようにしたいのである。</p> <p>ここまで、教育目標に示された子供の育成に向けて、教師の学び方に焦点を当てて述べてきた。では、教師は「何」から学ぶのだろうか。</p> <p>例えば、歴史研究がある。学習指導要領研究がある。どう教えられてきた（学ばれてきた）か、何をどう教える（学ぶ）のか、その変遷などから我々は知見を得られる。例えば、著名な実践者や大学の教授がいる。書籍から授業の手がかりを得たり、研修会で理論的枠組みを学んだりすることができる。同じ学校の中に授業のプロや教科教育の専門家がいる場合もある。いずれの場合も、学んだことを実践しなければ意味がない。学びを実践へと移したとき、どのように評価するのか。それは、子供の姿である。</p>		

学ぶ手段は様々あるが、それを踏まえた指導の評価は子供の姿に基づくものである。指導と評価の一体化とも言える。子供がどう学んでいるのか、何を学んでいるのか、子供にとってのつまずきや困り感は何か、ある子供はどう変容したか、というようなことを正確に、あるいは多様に、時に文脈を踏まえて見取る。これこそが、我々教師にとって何よりの学びである。

以上をまとめると次のように「学び」が連続していくと考えられる。

教師の学びが不可欠である。

教師の学びが子供の学びに結び付く。

教師は子供の学びの姿から新たな問いや仮説を立てる、もともと持っていた考えや仮説を修正する。

新たな学びを得た教師によって子供がまた学ぶ。

子供の学んでいる姿から新しい知見を得たり、あるいはうまくいかずに悩んだりする。…

教師の独りよがりの学びとならないよう、我々の学びと子供の学びとを何度も往還していきたい。

改めて、研究主題は以下のとおりである。

自ら考え、自ら判断し、自ら決定し、自ら行動する子供の育成（2年次） —教師の学びと子供の学びの往還を連続させて—

研究の内容と方法

教師の学びと子供の学びの往還を重視し、自ら考え、自ら判断し、自ら決定し、自ら行動する子供の育成を目指して、研究の内容と方法は次のように考えている。

（1）グループ編成

各教師は、自身の課題意識に基づいて、問いを立て、実践を積み重ねるのである。子供に求められている主体的・探究的な学びを教師が実践し、協働的に研究を進めることを意図している。

①各個人で、重点教科や授業における教師の役割を考える。

②研究推進委員で、学年、教科、経験年数等を考慮してグループを編成する。

（2）グループ単位で研究に取り組む

どのように研究を進めていくかを具体的に計画するのは、各グループを構成する教師である。例えば、次のような計画が考えられる。

〇〇先生の10月の授業研究（指導主事来校）に向けて、

・6月に□□先生の授業研究、7月に△△先生の授業研究をグループで行う。

・夏休みに指導案作成のため関連する文献研究や諸研修会への参加を各々行い、8月に紹介し合う。

・9月に、著名な実践家の授業DVD映像を見て進め方や発問に学ぶ。

・9月に、〇〇先生の授業をグループで見て、子供の学びの現状を把握する。

…

これは一例であるが、各グループの思いや学びたいことに基づいて計画され、日常的な実践の積み重ねが前提であることは言うまでもない。後述する研究の計画は、校内全体として研究の時間を設けたものであり、各グループが必要に応じて実践の場を設けたり、校内研究という枠でとどまらず日常の実践が研究そのものになったりすることを想定する。

（3）各グループの研究の現在の位置の把握や校内での共通の学び生成のための校内授業研究会

グループでの研究を進めていく中で、視野が狭くならないように、グループでの学びを本校での学びという共通したものにするために、校内授業研究会を行う。これは、校内研究に参加する者全員が参加する授業研究会である。全3回を想定しているが、増えることも考えられる。

（4）各グループの実践を他グループの教職員に報告する

各教師の思いや学びはそれぞれ異なっても、それらは別々のものではなく、複雑に絡み合ったものだと考えられる。そこで、各グループの成果や今後の展望を踏まえた実践報告を定期的に行う。すると、各グループの実践が別の視点からも価値づけられたり、今後の研究の展開に示唆を与えたり、あるいは自らの課題の更新の必要性に気づいたりするなど、さまざまな効果を期待できる。特に、各教師の毎日の授業づくりの手がかりとなる情報は、すぐに全職員に共有できるようにしたい。

研究の計画

- 4月14日 第1回 研究全体会 (昨年度のふりかえりと今年度の方向性)
- 5月 1日 第2回 研究全体会 (研究グループで年間計画の話し合い)
- 5月26日 第3回 研究全体会 (カリキュラム・デザイン表の作成)
- 6月 2日 グループ研究
- 6月23日 校内授業研究会①※
- 7月14日 第4回 研究全体会 (授業研究会①省察)・グループ研究
- 7月28日 第5回 研究全体会 (学級経営・心理的安全性と授業)
- 8月27日 第6回 研究全体会 (全国学力・学習状況調査の分析)・グループ研究
- 9～12月 グループ研究強化期間
- 1月 9日 第7回 研究全体会 (研究のまとめの方向性)・グループ研究
- 1月23日 第8回 研究全体会 (個人のまとめ→グループのまとめの見通し)
- 2月25日 第9回 研究全体会 (研究の総括と来年度の展望)

※この計画の日程の他に、各グループでの授業づくりや授業研究など、活動に取り組む

※校内授業研究会とは、校内研究に参加する者全員で授業を見て学ぶものである。全3回を計画し、指導主事より今後の研究の方向性を示す指導・助言をいただく。